

との重合領域に成立して来たと考える。時間の経過に伴って人工の空間を形成する価値観も技術も変化し、自然の環境を支配する条件も変動してゆく。その如何なる変化や変動が造園の世界に如何なる影響を与えたか。その蓄積の上に、造園の世界には如何なる将来像が考えられるか。

それを歴史と呼べるのか否か、異論は多いかも知れない。しかし、その認識を欠いて造園教育の展望は可能であろうか。筆者の講義は中世代と新生代を画する地球の気象変動と人類の発生に始まる。そして人間の直立歩行が知能の発達と生殖の特異化を結果し、他の生物と異なる居住生態を発達させ生活環境の認識を特化させる。また生活手段に火を得て人工的な生活空間を開き「さらに地球環境の変化の中に農業生産という行動を展開し、地球水準での土と水と緑に関する環境改造を開始する中に、今日的な造園の芽生えが認められないか」と説き、その祖形を古代メソポタミアのジグラッドに植栽跡があるとの説に求める。炎熱乾燥の地に建設された都市環境にとり、好ましい自然とも言うべき水と緑は貴重なアメニティを象徴するランドスケープと考える。そこには大河の沃野に豊かな稔りを得た民が築きあげた人工の空間に自然の環境と接点を求めた風景があつたろうか。

日本列島の場合、時代がややさがり縄文暖期が極盛を過ぎた頃、南北交流の接点にあたる青森の三内丸山には巨大木造構造物に象徴される集落が成立した。それは祭紀、生産、交流、居住の機能に対応した地区構造を形成したとされるが、その海上に姿をうつしたであろう高樓は三千年後の耶馬台城柵上に聳えた楼觀に伝統を残したかも知れない。この構造物を高樓と断定するには異説も多いが、自然環境の寒冷化による食糧難と対応した交易の活性化に、その風景は大きい社会意義をもったであろう。弥生暖期に始まる西日本の米作を基盤にした新文化の出現、近畿や北九州の弥生文化は紀元前後の建築遺構などにも知られつつあるが、鍵唐古遺跡の三重環境など、あり得たかも知れない重層建築をうつす絵のような景色が設計に意図されたか。

造園教育の問題を論じる貴重な紙面を徒にロマンティックな風景描写に汚したかも知れない。しかしランドスケープのデザインに人が期待するのは世俗のアメニティに富む生活環境の提案に始まるであろう。歴史の夢を具象化する能力を通じ社会に貢献する技術集団であるべき造園人の立場がそこにある。

筆者は現在いくつかの大学で「環境修景論」「修景計画論」「環境デザイン」「観光と環境」などのテーマによる講義とランドスケープデザインの実習・演習および大学院の特論を開講している。各講義や特論の過半は「まなびのにわ」「まつりのにわ」から人間の生活環境を過去にさかのぼって展望し、農業文明に前後する環境の景観に関する動態そして産業革命以降の社会が成し得た成果、さらにその

文明が結果しつつある地球への影響と未来の課題にふれる。それは三十年前の平城宮跡庭園発見以来、新しい造園史上の知見が見出され続いている中に、ランドスケープアーキテクチャに携わる者が心すべきアイデンティティーの構築へ端緒となる「動かざるもの」への示唆と考えられる。計画技術の知識について語る余裕がないのは筆者も学生も不満であるが、問題の所在を指摘し、先人が課題と対応した英知の一端に言及する中に生得の山水を論じた四十年余、ダイナミックなランドスケープのエコロジーを教育の原点と考える昨今である。（神戸芸術工科大学芸術工学部）

信州大学農学部における造園の歴史教育

佐々木邦博

まず本題にはいる前に一言述べておきたい。今回のテーマは非常に重要なが、提示された論点にストレートに応えることは困難なので、現状を紹介するとともに問題点を整理し、その中で論点にも若干ながら触れることにする。

信州大学農学部では今年4月から改組され、森林科学科の中に緑地環境文化学講座ができる。造園学の分野はこの講座に含まれることになる。

造園に関する歴史教育だが、それは主に「緑地文化史」という2年、3年生向けの講義で行われ、私が担当している。本来なら現在造園の分野のあらゆる範囲に関して歴史的に取り扱っていくのが望ましいのだが、残念ながら、私の力量不足によりそこまで全く到達していない。様々な庭と公園を歴史的に紹介することにとどまっている。講義では名称のように庭や公園がもっていた文化的側面を扱うことを重要視している。また、日本の庭や公園ばかりではなく、ヨーロッパの庭や公園をも講義の対象としている。

現状を具体的に紹介するなら、まず日本の歴史を時代区分し、各時代の代表的な庭や公園を取り上げている。時代区分とは歴史の教科書にあるように奈良時代、平安時代、鎌倉時代という区切り方である。そしてその時代に造られた代表的な庭や公園をいくつか取り上げ、スライドと平面図を使いながら現況を説明するとともに、作庭の時から現在に至るまでどのように姿が変えてきたかという点も、わかる範囲内で説明を加えている。そしてその時代の文化との関連をも説明するが、それは主に建築物との関連や庭や公園の利用の面から行っている。ただし、これらの点に関して私の勉強不足ゆえに未だに詳しい説明を行うことはできないでいる。

ヨーロッパの庭や公園だが、日本の場合とほぼ同様の方法で説明している。庭を主に様式別に分け、例えばイタリ

ア式庭園とかフランス式庭園というようにだが、そしてそれぞれの代表的な庭をいくつか取り上げて説明している。ヨーロッパの場合は作庭当時の絵や図面が残っている場合があるので、その資料を用いながら、なるべくその当時の姿を説明することにしている。その後で、現在の状態を映したスライドと簡単な平面図を用いて、作庭当時からの変化を説明している。最後にやはりその時代の文化との関連を解説するのだが、日本の場合と同様に建築物との関係や、庭や公園の利用の面を中心に行っている。

このように「緑地文化史」の講義を進めているのだが、問題は山積している。まず第一に時間不足があげられる。90分の講義を15回行うことが規定されているが、この時間数では日本を取り扱うのが7.5回、ヨーロッパを取り扱うのが7.5回である。上記した内容をきわめてあっさりとしか扱うことができない。

次の問題だが、いくらスライドや平面図で説明しても、当然ながら限度がある。残されている古い庭や公園を実際に見て味わうのが一番よいのだが、残念ながら信州大学農学部には現在そのような実習はない。

最後に庭や公園の評価をどのように行うか、どのように教えるかという問題がある。またこれは見る目をどう養うかという点にもつながる。現在は時間の制約もあるので、ただ淡々と説明しているにすぎないが、庭や公園のすぐれているとされる点を説明するとなると、ひとえに私の力量不足なのだが、評価していく視点が定まらなくなる。私の個人的な好みを語るならそれでよいのだが、昔のあるいは現代の人々による評価を取り扱うとなると、はなはだ心もとない。次善の策として、いろいろな面から分析を加えていこうと心がけているのが現状である。

以上のような問題を抱えているが、造園の歴史に関する教育は造園の分野にとってきわめて重要と言える。冒頭に説明したように造園の分野全般を取り扱ってはいないのだが、古い庭や公園など造園の歴史的な文化遺産を見て味わう目を育てる必要がある。造園の歴史教育はそれを担当するとともに、学生がその重要性を認識していくことにつながる。また別の面だが、学生が卒業後に造園にかかわる仕事をしていく際に、造園の歴史を把握していることが自分自身の考えを育んでいく上で一つの基盤となっていく。また同時に、設計でも施工でもそうだが、感性の一つの源になっていく。この点から見ても歴史教育の重要さがうかがえるのである。

ただ、このように造園の歴史教育の重要性を強調すればするほど、現在私が行っている講義の不十分さが目に付いてくる。今後よりいっそうの改善を図っていくとともに、大学院での講義を行うことも視野に入れて考えていかねばならない課題といえる。

(信州大学農学部)

空間と時間のパースペクティブを描くために

進士五十八

中国では、土木研究所のメインは歴史の研究室である。そんな話を聞いたときナルホド「経験の学…造園」に限らず、歴史学こそあらゆる学と術の基本だと痛感したものである。

生物学、植物学、生態学、数学、物理学、社会学……といふら積み上げても「造園」を結果することはない。先人たちが積み重ねてきた数々の造園的事実(=歴)と、造園空間や造園活動の実体を、様式論として、或いは庭園観、風景観、自然観として統一的に論じられ記述されたもの(=史)を通じてこそ、現在の造園、そしてこれからの造園が展望可能となるのである。

にもかかわらず現実には、情報化、高度化、先端科学技術へといった潮流の中で、目先の変わった小未来を皆んなが追い求めてしまい、シッカリと歴史を踏まえて大未来を展望しようとはしない。

歴史認識を持つことでイデオロギーになるが、歴史認識を持たなければ単なるファッションになってしまう。

数年前から東京都は浜離宮庭園の復元整備をすすめている。江戸初期の浜御殿以来將軍家の庭園として特別史跡特別名勝に指定されていることは勿論、大名庭園、回遊式庭園の典型として造園史上極めて意義深い庭園であるから当然のことと言つてよい。

すなわち、歴史的価値、文化財的価値が認められての復元整備事業ということになる。

確かに当初はそうした位置づけで、都の長期計画には「名園の復活」事業としてあげられていた。ところがバブル崩壊、税収の激減で「名園」の看板は取り下げられてしまった。それを都の造園関係者の努力で何とか「水辺の再生」事業ということで続いているのである。

いわば、自然的価値、環境的価値を、鴨池や汐入池に与えることによって財政担当者の了解を得ているわけである。

浜離宮庭園全体の文化的価値よりも、その一部の水辺の環境価値が認められると言う、こうした逆転現象は決して珍しくない。

戦後日本が経済成長を推し進める過程で、海岸を埋め立て工場立地を計画し、美しい砂浜や松林を崩壊し、住宅のプライベートグリーンや都市農地、平地林を潰して、高密度の都市化をすすめた後、人工海浜の造成や公園緑地用地の買収にやっきになる、といった図式に“時代のニーズ”“国民のニーズ”といった言い方で、真の「歴史認識」を持とうとしなかった日本近代の本質がかいまみられる。